

# SHOW HEYシネマルーム



## Data

監督・脚本：キャリー・ジョージ・フクナガ

出演：パウリーナ・ガイタン/エドガー・フロレス/クリスティアン・フェレル/テノック・ウエルタ・メヒア/ディアナ・ガルシア

## 👁️👁️ みどころ

豆満江を越える脱北者は後を断たないが、彼らはなぜ命がけで国境を越えるの？『フローズン・リバー』（08年）は舞台こそ違え、そんな現実を直視させたが、本作もそれは同じ。彼らはなぜホンジュラスからメキシコを経てアメリカへの危険な旅を？「移民」モノ、「国境越え」モノの名作がまたここに誕生したが、本作は「ロミオとジュリエット」ばりの悲恋が胸を打つ。

いかにもグッドな邦題をしっかりと確認しながらその切なさを噛みしめ、かつノー天気な日本を反省する素材にしたい。

## なぜ移民を？なぜ国境越えを？

2010年3月26日に起きた韓国の哨戒艇「天安」の沈没事件以降、朝鮮半島における南北問題が緊張感を増している。6月5日か6日に軍事衝突が起きるとのまことしやかな噂まで流れたほどだ。こうなると、北の崩壊と、来るべき南北の軍事衝突を予測した「脱北者」がますます増大するのでは？ところが、内向きの政局に明け暮れる日本は、とんとそんなことには無関心？しかし、世界は違う。

『シリアの花嫁』（04年）は、イスラエルのゴラン高原から敵国シリアの男性のもとへ国境を越えて嫁いでいくヒロインを描いた名作だった（『シネマルーム22』166頁参照）が、「移民」モノ、「国境越え」モノは秀作・名作が目白押し。最近私が観たものだけでも、

偽装結婚でベルギーへ入国したヒロインを描いた『ロルナの祈り』（08年）（『シネマルーム22』133頁参照）、移民受け入れ先進国イギリスにおける、理念だけではない移民労働者の実態を描いた『この自由な世界で』（07年）（『シネマルーム21』247頁参照）、

そして カナダからアメリカへ「凍った川」を渡ること命をかける『フローズン・リバー』(08年)(『シネマルーム24』61頁参照)などがある。彼らはなぜ移民を?なぜ国境越えを?

## ここにまた、「移民」モノ、「国境越え」モノの名作が!

本作はメキシコからアメリカへ渡る「国境越え」モノだが、ヒロインはメキシコ人ではなく、それより更に南ですべて劣悪な環境下にあるホンジュラス人。アメリカから強制送還されてきた父親がもう1度アメリカへ密入国するため、叔父さん(父の弟)と一緒にホンジュラスで暮らしていた少女サイラ(パウリーナ・ガイタン)もアメリカへの密入国を決心したわけだ。

ホンジュラスからアメリカへの旅は、グアテマラとメキシコを越える長く危険な旅。もちろん国境巡視隊に捕まれば、すぐに強制送還だ。父親との再会を喜びヒマもなく、サイラは父親・叔父さんと共に列車の屋根の上に乗ることに……。ここにまた、「移民」モノ、「国境」越えモノの名作が誕生!

## なぜメキシコにはギャングが?それはあの映画を!

本作は少女サイラとギャングの青年カスベル(エドガー・フロレス)の悲恋(?)を描いた、言わば「国境越え」モノの「ロミオとジュリエット」。本作ではホンジュラス人のサイラとメキシコ人のカスベルが出会うまでの導入部において、顔も上半身も入れ墨だらけの男リルマゴ(テノック・ウエルタ・メヒア)をリーダーとするギャング団マラ・サルバトウルチャ13(MS-13)におけるカスベルの活躍ぶり(?)が描かれる。カスベルはリルマゴの信頼が厚いようだが、今カスベルは恋人のマルタ(ディアナ・ガルシア)と秘密のデートばかり重ねていたから、それがバレるとヤバい。

ところで、なぜメキシコにはMS-13のような全国ネット(?)のギャング団があり、カスベルのような若者がたくさん集まっているの?しかもカスベルは12歳の少年スマイリー(クリスティアン・フェレール)まで仲間に引き入れたから、かなりタチが悪い?南米のスラム街における少年ギャングの生態は、ブラジルのリオデジャネイロの貧民街を舞台とした『シティ・オブ・ゴッド』(02年)を観れば明らかだが、なぜ南米やメキシコにはギャングが多いの?それは、戦後日本の闇市をヤクザが仕切っていたのと同じ構造?

本作のメインは「ロミオとジュリエット」ばりのカスベルとサイラの悲恋物語だが、導入部に描かれるカスベルとマルタとの悲恋物語をみると、カスベルはもともとギャング団には向かない、繊細で純真な心を持ったいい男……。

## 娘ゴコロは?しかし、その決断はお見事!

MS-13のボス・リルマゴは一見恐そうだが、意外に人間味あふれるいい男?そう思

っていると、カスペルの恋人マルタにいきなり襲いかかったり、列車の屋根の上にひしめき合って座っている移民たちからカネを強奪しようとした際、カネだけでなくサイラを犯そうとしたり、やっぱりワル！そこで、リルマゴによって恋人のマルタが殺されたと認識しているカスペルがとっさに取った行動は、リルマゴに対して鉈を振り下ろすこと。そりゃ一体なぜ？そんな行為がもたらす意味をカスペルはわかっているの？

鉈を振り下ろした瞬間は、今にもリルマゴがサイラを犯そうとしている瞬間に、リルマゴがマルタを犯している姿を重ね合わせたための衝動的な行動だが、リルマゴ死亡の事実が明らかになれば、自分が組織から追われ、殺される運命にあることはすぐにはわかってはく。他方、純真なサイラにそんなことが全くわからないのは当然。そして、リルマゴの魔手から自分を救ってくれたカスペルが「白馬の王子様」のように見えたのは当然だ。初仕事として強奪行為に加わっていた12歳のスマイリーを列車からおろしたカスペルはバカではない。今後追ってくるはずのギャング団からいかに逃げるかを考え、ある時列車から離れたが、何とその後ろには父親と叔父さんを列車に残したまま一人カスペルを追ってきたサイラの姿が。こりゃ一体ナニ？

娘ゴコロは実に不可解？しかし、その後にもみせる行動をみていると、その決断はお見事！

## このヒロインに注目！

プレスシートによると、キャリア・ジョージ・フクナガ監督は本作のヒロインであるサイラ役にはホンジュラス人を求めたため、最初パウリーナ・ガイタンはサイラ役ではなくマルタ役にオファーされたらしい。しかし、パウリーナ・ガイタンははっきり「サイラの役でなければ、私は映画に出演しません」と言ってサイラ役を獲得したとのことだ。そこまで監督に迫るほどの迫力が、本作のヒロインにはほとぼしり出ている。

年頃の娘がリュック1つ背負って大勢の男たちに混じり列車の屋根の上に乗って国境を越える旅を続けることがいかに大変かは明らかだが、彼女の何ゴトも恐れずそれにチャレンジしていく姿には感動する。とりわけうまいなと思ったシーンは、長時間歩いた後やっと休憩する時に靴と靴下を脱いだ後、親指にできたマメを見せる時。女の子ならそんなシーンを演ずることに抵抗があるかもしれないが、その痛さに耐えて黙々と歩いてきた彼女の気力に感動する名場面だ。また、映像的に興味深いのは、クライマックスに向けて下着姿になった彼女が川を渡る場面。川幅はそんなに長くはないが、深いところや流れの急なところがあり、案内人がいなければ渡れないらしい。1人ずつだと言われて、恥じらいながら脱いだ服をビニール袋につめ込み、下着姿のまま浮輪をもって案内人と共に川を渡るうとする姿にも感動。本作最大の見どころはこのヒロインだ。

## この女優にも注目！

パウリーナ・ガイタンの代わりにマルタ役として登場したディアナ・ガルシアにも注目！

マルタはカスペルの恋人でちょっと生意気そうなお嬢サマだが、ギャング団の一員としてのカスペルの姿を知らないため、娘ゴコロが少しイラついているらしい。カスペルとの秘密のデートで見せてくれる積極的なヌードシーンは、一瞬だが生ツバもの。セックスシーンはスマイリーが少し覗く程度しか見せてくれないが、カスペルの制止を聞かずマルタはどんどんカスペルの世界に入り込んでいったが、そんなことをして大丈夫？

不幸にもそんな心配がピタリと当たり、ギャング団のボス・リルマゴの目にとまった彼女は大変な目に遭うのだが、本作ではそんな薄幸の美少女マルタを演じたディアナ・ガルシアにも注目！



(C) 2008 Focus Features LLC. All Rights Reserved.

## ここにまた、ロードムービーの名作が！

ロードムービーの名作は多い。「婚カツ」をテーマとしたエミール・クストリツァ監督の『ウェディング・ベルを鳴らせ！』（07年）は異色のテイストで、徹底的に楽しいものだった（『シネマルーム22』162頁参照）。また、スティーヴン・ソダーバーグ監督の『チェ 28歳の革命』（08年）（『シネマルーム22』92頁参照）『チェ 39歳 別れの手紙』（08年）とは全く違う視点から、若き日のゲバラの瑞々しさをロードムービーの形で描いたすばらしい作品が『モーターサイクル・ダイアリーズ』（04年）だった（『シネマルーム7』218頁参照）。他方、孫娘の春と共に兄弟弟を訪ねて北海道から東北地方を回る仲代達矢主演の『春との旅』（10年）は、現在日本の老人問題や地方の衰退を背景とした人間味あふれるドラマとして構成されていた。

それに対して本作は、ホンジュラスからメキシコを経てアメリカ国境までの列車の旅と、

ギャング団からの報復が迫る中で生まれてくるカスベルとサイラの純愛（悲恋）を描いたロードムービー。私たち日本人には到底想像できない世界の中で生き抜こうとする若者たちの切なさが胸を打つ。ロードムービーの名作は多いが、そのテイストはさまざまだ。そして、ここにまた、ロードムービーの名作が誕生！

## この邦題はグッド！

プレスシートによると、原題の『Sin Nombre(シン ノンブレ)』は英語で「without a name(名前がない)」もしくは「nameless(名無し)」という意味らしい。なるほど、本作の主人公たちを見ていると、その原題はピッタリだ。

他方、本作中盤に展開されるメキシコ縦断旅行において重要な役割を果たすのが、長距離列車。何度も列車を乗り換えての「大陸縦断列車の旅」だが、これは列車の屋根の上に乗り込んでの無賃乗車かつ違法乗車。国境巡視隊に見つかればすぐに逃げ出さなければならないし、中継点で水浴びをしたり食料品を購入したりしながらの行き当たりばったりの旅。そして、出発前の父親の言葉によると「ここに集まった人たちの半分しかアメリカには着けない」らしい。しかも、こちらは南国だから「フローズン・リバー」ではないが、国境越えには川を渡る危険も冒さなければならないから危険がいっぱい。しかし、無事国境を越えてアメリカに入国できれば、そこは「自由の国」だから希望がいっぱい。それがどこまでホントか否かは別として、国境越えを目指す移民たちはそれを信じて危険を冒しているわけだ。そう考えると、『闇の列車、光の旅』はいかにもピッタリ。最近珍しく、この邦題はグッド！

2010(平成22)年6月12日記

## リニアの大阪延伸は、俺が活着ているうちに！

『闇の列車、光の旅』の大陸縦断列車の旅では、長距離列車がストーリー構成上大きな役割を果たしたが、新幹線を上回るスピードを誇るリニアモーターカーが導入されたら、その効用は？国土交通省の交通政策審議会中央新幹線小委員会が、10月20日想定ルート別の経済効果を発表したことにより事実上「直線ルート」が確定した。しかし、その開業は東京(品川)-名古屋間が2027年、東京-大阪間が2045年を目指して

いるらしい。2010年の今年、私は61歳。すると、大阪まで延伸されるのは、96歳の時。とてもそれまでは生きていないだろう。小委員長は、大阪への延伸前倒しについて、「45年より早くした方が良いのではないかと述べたそうだが、是非そうしてほしい。少なくとも私の目の黒いうちに上海で1度だけ乗ったリニアの姿を日本でも拝みたいものだ。

2010(平成22)年10月28日記